横浜プロテスタント史研究会報　2023.3.20　No. 74

聖書とヘボン

岡部　一興

はじめに

私の研究テーマは、日本におけるキリスト教受容ということで、色々の教会を訪れてその地域においてキリスト教がどのように受容されたかを研究してきた。また、受容にあたってキリスト教をもたらした宣教師の研究に勤しんできた。今回のテーマは、日本に聖書をもたらしたヘボンに焦点を絞り、「聖書とヘボン」ということで研究発表をした。

１．ヘボンがもたらしたもの

日本の文化にもたらした功績は大きい。1859年10月18日来日、宣教医として、多くの人々の命を救った。また「ミセス・ヘボンの学校」通称ヘボン塾を開設して、英語の学習を通して多くの人々を育てた。1872年９月第１回宣教師会議が行われた。そこで決まったことは、①共同訳聖書の翻訳、②一致神学校、③無教派の教会形成、それに讃美歌の編纂であった。

ヘボンの最大の関心は、共同訳の聖書を翻訳することであった。聖書和訳をするにあたり、日本語訳を手掛ける基礎作業としての辞書を編纂することが不可欠と考えた。彼は７年の歳月をかけて『和英語林集成』を出版した。日本人にとってはこの辞書は、英語力の向上と外国文化に触れる礎となった。また外国人には日本語と日本文化の理解に役立ったという意味において、近代日本における文化面と学術面における貢献は大いなるものがあった。1867年に和英英和辞典である『和英語林集成』を編纂、９版を重ね、約３万５千618語を収録､明治期最大の辞書としてもてはやされた。1860年に入ってヘボンは、日本人教師を雇い『和英語林集成』の編纂に着手、辞書作りでは、患者と相対して一つ一つの日本語の言葉を英語に置き換えて、ノートに綴っていった。66年９月ヘボン夫妻は岸田吟香を連れて上海に行き美華書院で印刷をし、翌年５月に出版した。

２．聖書和訳

漢訳から始まった聖書和訳

ヘボンが日本語の勉強と施療をするなかで、

目次 兼 研究発表リスト（その45）

＊研究発表リストは一部前号と重複します。

第435回　2022. 9. 17
聖書とヘボン …… 岡部一興 … 1
第436回　2022. 10. 15
横浜連合婦人会館の建設に力を尽くしたクリスチャン女性たち …… 江刺昭子 … 3
第437回　2022. 11. 19
エステラ・フィンチ―日本陸海軍人伝道にささげた生涯 …… 海野涼子 … 5
第438回　2022. 12. 17
『横浜海岸教会150年史』の編纂に関わって …… 岡部一興 … 7
第439回　2023. 1. 21
賀川豊彦の戦争責任告白 …… 宮城幹夫 … 10
報告 …… 12
編集後記 …… 12

1861年春頃からマルコ伝の翻訳に取り掛かった。ヘボンとS.R.ブラウンは中国語ができたので、漢訳聖書を参考にしていた。二人は、共同訳の聖書を出したいと思っていた。翻訳したものを出版するには何度も改訂し慎重に作業をしなければいけないと思っていた。1871（明治４）年ヘボンはS.R.ブラウンと馬可（マルコ）伝を訳し、1872年秋出版、続いて同じ年に約翰（ヨハネ）傳を出版した。これらの訳は、和漢の学に長じていた奥野昌綱の力に負うところが大きかった。

３．翻訳委員会による新約聖書の翻訳

共同訳による聖書翻訳が実際にスタートしたのは、1874年３月からであった。委員長はS.R.ブラウン、委員にはヘボン、D.C.グリーン、聖公会からC.M.ウィリアムズ、G.E.エンサー、米国・メソジスト監督教会からR.S.マクレー、米国・バプテスト教会からN.ブラウンが指名された。しかし、ウィリアムズとE.エンサーは、代わってパイパー、ライトが参加。翻訳委員社中が動き始めて間もなく、パイパー、ライトも、さらにマクレーも委員を辞任、またN.ブラウンは、バプテスト派独自の聖書翻訳を進めることから一年半後に辞任した。

結局ヘボン、S.R.ブラウン、D.C.グリーンの３人が訳業に従事、補助的援助者として、奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎が与えられ、翻訳事業の会議はS.R.ブラウン邸に集まり翻訳作業を行った。新約聖書全体の翻訳が終わったのは、1879（明治12）年11月３日のことで、翌年の４月19日東京の新栄橋教会（現新栄教会）で完成祝賀会が行われた。一方、独自の翻訳を進めていたN.ブラウン訳の新約聖書は、共同訳聖書より３カ月早く1879年８月のことであった。この聖書は仮名表記による平易な文字で記述され、全国民が共通に平等に使用できることを目的としていた。その点では、ジェームズ欽定訳を標準とするヘボンたちの訳とは違って、N.ブラウンの翻訳は原典主義に基づき、平仮名主義を主張するものであった。その聖書は『志無也久世無志與』（しんやくぜんしょ）と言う表題で、バプテスト派が所有する印刷所で作成された活版印刷の聖書だった。それに対し、ヘボンたちの共同訳聖書は和綴じ本で、当時日本で一般的に行われていた版木による木版刷りであった。

４．ヘボン（S.R.ブラウン）訳と委員会訳

	ギュツラフ訳	ヘボン訳	委員会訳
God	ゴクラク	神（かみ）	神（かみ）
Love	メグミ	いつくしみ	愛（あい）
Sabbath	モンピ	安息日（あんそくび）	あんそくにち
Glory	クライ	威光（いこう）	栄光（えいこう）
Church	ヨリヤイヤド	集会（しゅうかい）	教会
Devil	ヲニ	あくま	悪魔
Baptism	コリヲトル	せんれい	バプテスマ

※翻訳委員会　1875年５月８日、baptismをめぐって協議。ヘボンが採用した「洗礼」に対し、N・ブラウンは、「洗礼」はwashing、着物を洗うというような意味になり、適当ではない。Baptismは人間を水にしずめる儀式であるといった。「洗礼」に賛成は、ヘボン、バラ、カロザース、ルーミス、マクレー、フルベッキ、C.M.ウィリアムスら16名、「バプテスマ」はN.ブラウン、バーンサイド、スタウト、ライトら30名。回答なしが９名。同年に刊行された『路加伝』は、「バプテスマ」になっている。しかし、N.ブラウンはこれにも不満、独自の聖書翻訳に進む。

８．旧約聖書　分冊出版全部で28冊

旧約聖書が翻訳され出すと、随時分冊出版の形を取った。洋仮綴じの形を取って、1882年に「約拿哈基馬拉基合本」（ヨナ、ハガイ、マラキ）が出版されて以来、1887年に「雅歌耶利米亜哀歌」（ガカ、エレミア、アイカ）が出版されるまで、28分冊に分けて随時発行された。1888（明治21）年２月３日東京築地の新栄教会にて完成祝賀会が行われた。新約聖書の翻訳委員が決まってから実に15年の歳月が経過し、新約と旧約聖書の両方に携わったのはヘボンただ一人でした。それらの翻訳の作業において、聖書翻訳をトータルにみた場合、ヘボンがどのくらい聖書を翻訳したかをみると、驚くべきことが明らかになったのである。新約聖書27巻と旧約聖書39巻合わせて66巻のうち、新約聖書の６割以上、旧約聖書の４割ほどがヘボンによって訳された。以上の分析を通して、ヘボンが係わった聖書翻訳は、日本人の補助者たちが言語に十分な知識を備えていない時代にどのよう

にして理想とする共同訳聖書が編纂されたのか。また今後の課題としては、ヘボンたちが翻訳した聖書がどのようにして翻訳されたのかという聖書和訳そのものの研究が必要かと思われる。

終りにあたって

ヘボンが来日した最大の目的は、共同訳の聖書を翻訳することであった。旧新約聖書の両方に関わったのはヘボンだけだった。聖書和訳をするにあたり、重要なことは翻訳の基礎作りとして辞書を編纂することであった。翻訳にあたり困難な問題は、第一にキリスト教の独特な用語をどのように訳すかであった。キリスト教の「神」「愛」については、中国のブリッジマン、カルバートソンが訳した新約旧約聖書からヒントを得て、「上帝」の訳語から「神」という言葉に訳すことにした。第二には文体をどうするかということであった。当時は日本語が定まっていない状況があり、方言、武士の言葉、町人の言葉、女と男の言葉があり、漢文にするか、平仮名にするか、仮名まじりにするかという問題があった。日本人助手は漢文を主張、ヘボン、S.R.ブラウンは、聖書は誰でも読めるようにしなければならないと考え、「標準語」で仮名まじりの文章にすることを決めた。

参考文献

1. 岡部一興編、高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館、2009年　**2.** 拙稿「聖書和訳とヘボン」明治学院大学キリスト教研究所紀要、第48号、2016年　**3.** 海老澤有道『日本の聖書』講談社学術文庫、1989年　**4.** 高谷道男編訳『SRブラウン書簡全集　幕末明治初期宣教記録』日本基督教団出版局1965年　**5.** Z.イエール「明治初年の新約委員会に関する新資料」“Record of the Committee for the translation of the Bible into the Japanese Language”『聖書翻訳研究』N.23 DEC. 1985. 日本聖書協会　**6.** 高谷道男編訳『ヘボンの手紙』有隣新書、1976年　**7.** 佐波亘・小沢三郎共編『植村正久と其の時代』復刻再販、第４巻、教文館、1976年　**8.** 川島第二郎『ネイサン・ブラウン「志無也久世無志與」』復刻・別冊、2008年　**9.** 木村一『和英語林集成の研究』明治書院、2015年　**10.** 山口豊編『岸田吟香『呉淞日記』影印と翻刻』武蔵野書院、2012年　**11.** 鈴木範久『聖書の日本語ー聖書和訳の歴史』岩波書店、2006年，他

横浜連合婦人会館の建設に力を尽くしたクリスチャン女性たち

江刺　昭子

横浜連合婦人会館の建設

1923年９月に発生した関東大地震で横浜は大きな被害を受けた。直後の10月、横浜の女性団体有志が横浜連合婦人会を立ち上げた。中区太田町の横浜基督教女子青年会の焼け跡のテントの中だった。

会長は、明治期から多くの女性団体のトップを務めてきた渡辺たま。横浜を代表する豪商、渡辺福三郎の妻である。市内を10区に分け、各区に方面委員を割り当てて被害調査をし、老人、子ども、病人、貧困者らには食糧や衣類や布団を、母乳不足の乳児には練乳を配給した。

救援活動が一段落したところで、皆が集まる場所が欲しいということになり、横浜連合婦人会館の建設を企画した。公的な支援に頼ることなく、女性たちだけの手で施設を作ろうというのである。無謀な計画ともみえたが、会員たちが一軒一軒を訪ねて趣旨を説明し、10銭募金を集めた。それに渡辺家からの出資を加えて、1927年には現在の西区宮崎町に横浜連合婦人会館を開館している。

建物は現存しないが、木造モルタル二階建てで、天井の模様が美しく、集会室やホールを備えた立派な施設だったという。現在の男女共同参画センター横浜南（フォーラム南太田）の前身である。

女性たちの社会活動の拠点ができたことで、以後、さまざまなテーマの講話や講演会、家庭展覧会、音楽会、料理講習会、洋裁講座、不用品交換会、女中会などを開催しながら、バザーや音楽会で得た収益金を災害地などに送る活動をしている。

戦前、公的な女性施設がほとんどない時代に民間の女性たちだけで、社会教育施設としての婦人会館を建てたのは、全国的にもきわめて珍しい。では、これを建てた横浜連合婦人会はどんな会なのだろうか。その中心に、明治期から続くクリス

チャン女性たちの献身的な活動があったことがわかった。

横浜連合婦人会の加盟団体及び役員

婦人会館ができた当時と思われる横浜連合婦人会の所属団体と役員の名簿によると、団体は次の23団体である。

仏教婦人会・基督教婦人矯風会支部・横浜基督教女子青年会・櫻楓会支部・横浜市女教員会・神奈川高等女学校・横浜高等女学校・フエリス和英女学校・真澄会・神奈川県看護婦連合組合・横浜市産婆会・仏教婦人救護会支部・捜真女学校・共立女学校・共立女子神学校・横浜英和女学校・若草会・海岸教会婦人会・横浜組合教会婦人会・第一美普教会婦人会・指路教会婦人部・神奈川バプテスト教会婦人会・横浜メソジスト教会婦人会。

それぞれ慈善活動や医療関係、社会教育活動で長い実績を持つ団体ばかり。23団体のうち、下線を引いた14団体がキリスト教系で、矯風会と女子青年会のほかは、女学校の同窓会と教会の婦人会（部）である。若草会は、横浜婦人慈善会を引き継いだ団体で、会員はキリスト者である。

これらの団体の中でも役員として率先して活動したのは、二宮わか、野村美智子、高木鐸、時田田鶴、山下せう、三宅千代らで、彼女たちのほとんどが、矯風会と女子青年会の両方に属し、それぞれの教会の婦人部員としても熱心に活躍している行動派。

非キリスト教系は、仏教系の団体、教師や産婆などの職能団体、日本女子大学校の桜楓会や神奈川県立高等女学校の真澄会など女子校の同窓会。会長の渡辺たま、副会長の上郎やす、横浜高等女学校の田沼なる子・志ん母子らが中心。

複数の団体に所属している人も少なくないが、立場の異なる人びとが協働して大きな事業に取り組んだ背景に、明治期から続く横浜独自の女性たちの社会活動の歴史がある。それなくしては、震災後の混乱の中での迅速な団体結成、救援活動、会館建設、多様な事業の展開はできなかったと思われる。

横浜の女性たちのネットワーク

戦前の横浜で活動した女性団体を大きく分けると、キリスト教系と、実業家や商家の妻たちが中心になった非キリスト教系になる。東京のような反体制的な活動は労働運動以外では目立たない。

キリスト教系の女性団体は、基督教婦人矯風会支部の結成が最も早いが、横浜独自なのは横浜婦人慈善会。1889年に宣教師のヴァン・ペテン、聖経女学校教師の稲垣壽恵子、二宮わからメソジスト婦人伝道会のメンバーが結成した会で、女性たちだけで民営の横浜根岸病院を設立した。他に例をみない活動で、生活困窮者を無料で診察、入院治療をした。ここを拠点に不就学の子どもたちの学びの場を設けたり、足尾鉱毒被害者の治療にもあたったが、患者が増え、寄付やバザーの収益金に頼る経営がしだいに苦しくなっていった。

一方、豪商の妻である渡辺たまは、豊富な資金力を背景に孤児院や夜間学校の経営など社会事業に乗りだしていた。これを知った横浜婦人慈善会の稲垣が渡辺に援助を頼み、渡辺が資金投入をした結果、根岸病院の経営が安定した。

同じ頃、日露戦争が始まる。渡辺は会長として横浜奨兵義会婦人部を結成し、出征兵士の送迎、傷病兵の慰問、留守家族への内職の斡旋、保育所の経営などを始めた。これに横浜婦人慈善会の稲垣、二宮わか、平田もとらも協力し、立場の違いを超えた横浜女性の強力なネットワークができた。

日露戦争の銃後の女性運動は全国的には愛国婦人会が中心だが、横浜では奨兵義会婦人部の活動のほうが規模が大きく、活動も広範囲で、戦後、渡辺らは国から表彰されている。こうしてキリスト教系と非キリスト教系が合同した活動の成功体験が２つ重なったことになり、組織作りのノウハウ、事務の進め方、広報の仕方などを学んだ女性たちは、次つぎと活動の範囲を広げていく。

大正期に入ると、大正天皇の即位式にあわせて、横浜婦人慈善会と横浜奨兵義会を合わせた組織をそのまま引き継いだ形で「旗の日会」が結成された。小旗を作って街頭で売り、収益金を慈善事業や図書館事業に寄付している。次いで「横浜家庭製作品奨励会」を作り、生活改善に役立つ衣料などを製作してバザーで売り、これも慈善事業に寄付している。こうした日常的な活動があったから、震災後すぐに横浜連合婦人会を作って救援に力を尽くすことができたといえる。

また、常にトップを務めた渡辺たまのリーダーシップが大きい。商家の奥を預かってきた経営経理の才覚を生かしている。私生活は地味で、性格は控えめだが、懐が深い。書いたり、話したりする広報役は二宮わかや時田田鶴らに任せ、２歳違いの稲垣壽恵子の献身的な慈善活動に深く敬意を表し、基督教婦人矯風会にも入会していたという。

こうして書くと、横浜の女性たちの行動力に脱帽するばかりだが、現在の目で見ると、別の面が見えることも指摘しておきたい。明治日本では、キリスト教系女学校などで外国の女性宣教師から奉仕の精神を学んだ女性たちが横浜根岸病院の設立・経営にみられるような日本の社会事業の主な担い手になった。

それは、集会及政社法（のち、治安警察法第５条）で政治参加を禁じられ、性別役割分担で家庭に閉じこめられ、職業活動もきわめて狭い範囲でしか許されていなかった日本女性たちにとって、唯一許された社会活動が慈善事業だったからだ。それは社会貢献として高く評価されていいが、本来は国がするべき福祉を担ったことで、国の無策を見逃したことにもなる。しかも、主に女性たちが看護、介護、保育などのケア労働を無償、ないしは低賃金で担ったことで、ケアは女性がするものという性別役割分担を固定した。それが、21世紀の現在もケア労働の大部分を女性が担い、しかも低賃金であることにつながっているのではないだろうか。

『横浜連合婦人会館史　100年のバトンを受けとる』刊行

最後に、横浜の女性たちの熱意の結晶である横浜連合婦人会館と横浜連合婦人会のその後をたどっておこう。

そこに行けば、いつも誰かに会えて交流の場となり、おしゃべりの中から新たな活動のアイディアも生まれる場であった婦人会館だが、時代の波に翻弄される。

満州事変が始まった頃から、出征兵士への慰問金集め、防空演習への参加など、銃後の活動への参加を余儀なくされた横浜連合婦人会は、1936年には会館を横浜市に移譲して、「横浜市連合婦人会」と「横浜市連合婦人会館」になった。

連合婦人会は37年に渡辺が亡くなったあとも継続したが、国民精神総動員運動に会をあげて参加するなどしたのちの1942年に解散した。

横浜市連合婦人会館は、戦時中は軍隊の兵舎、戦後は進駐軍関係者が居住する「紅葉坂ホテル」として利用され、横浜市に戻されて「横浜市婦人会館」になったのち、老朽化で取り壊され、閉館した。その後、現在地の南区南太田に新しい建物で開館し、2005年に「男女共同参画センター横浜南」に改称した。

その男女共同参画センター横浜南に手書き原稿を製本した２冊の『横浜連合婦人会館史』が保存されていることがわかった。渡辺亡きあと、連合婦人会のリーダーになった野村美智子が編集したもので、「横浜連合婦人会館」を建設した経緯や活動記録、年表、回顧録などが２冊の冊子にまとめられている。戦前の女性団体はほとんど活動記録を残していない中で、この会館史が残されているのは稀有といえる。クリスチャンであると同時に、商家の有能な妻であった野村の視野の広さがうかがえる。

貴重な記録なので、解説や座談会などを加えて出版することになり、2022年３月、横浜男女共同参画推進協会・男女共同参画センター横浜南の編集・発行で、『横浜連合婦人会館史　100年のバトンを受けとる』が刊行された。電子ブックも横浜市男女共同参画推進ホーム協会のホームページで公開されている。私は監修と解説などを担当したことから、本稿は大部分を同書に典拠している。

エステラ・フィンチ
―軍人伝道に捧げた生涯

海野　涼子

長年の夢であった『エステラ・フィンチ評伝』の出版を2022年４月に叶えることができた喜びは大きい。

本を出す動機として一つは、一人の、無名ではあるがフィンチもまた1800年代のアメリカで生まれ、最も厳しいキリスト教精神を受けて育った多くの婦人宣教師たちの中の一人であったことを軍

人伝道という働きを通して検証してみたい。今一つは「北米の彼方からやってきて、未知の国日本でその人生を全うすることになったエステラ・フィンチがキリスト教の伝道者となる道を選んで自らの青春、国籍を棄て、日本人星田光代となってまで日本の人々を愛した。そんな一人の米国女性がいたという歴史的事実を証したいと思った。

はじめに　日本のプロテスタント史上の中でもキリスト教界に於いて、特に軍隊には宗教、特にキリスト教は育たないと定説のように言われていた頃、明確に軍人伝道を目的とし、軍人伝道こそ最も有望なりとして独特の使命に終始した軍人伝道が戦時下の神奈川県横須賀に於いてなされていた。それがフィンチと黒田が創設した軍人のための教会、「日本陸海軍人伝道義会」（略して伝道義会）である。何故「教会」としなかったのであろうか。黒田は名称にこだわりをもっていた。「もし教会としたら軍人は既存の教会のイメージが先に立ち、敬遠して来ないであろう。義会の義は「羊我」からきている。イエス・キリストを大牧者としてそこに集まる軍人達をさしずめ迷える羊たちとして迎える。何か悩みをもった青年達が安心して身体を休めることができる、また安らぐことのできる憩の場所であってほしい」との願いを込めて「義会」とした。伝道義会は明治32年～昭和10年まで36年間に亘り、多くの軍人をキリスト教に導き、約1,000人の信徒を生んだという。

第一章　来日前のエステラ・フィンチ

明治２（1869）年、米国ウィスコンシン州、サンプレイリー（Sun Prairie）に生まれる。父の名はジョン、母の名はアンヌ。エステラはその三女として生まれたという以外素性は不明。幼くして孤児になったとあるが、その詳細も不明。来日した折に所持していた日記によりニューヨークでバプティストの教会で働きながら貧しい生活をしていた事が分かる。この頃ある億万長者に見初められて養女となる。1882年にA.B. Simpson博士が創設した神学校（現在のナイアック・カレッジ）への入学の夢が叶う。３年後に神学校を卒業したフィンチは、日本への伝道を志し、明治26（1893）年「クリスチャン・ミッショナリー・アライアンス」より超教派宣教師として派遣され来日した。

第二章　手探りで始めた日本伝道

最初の仕事は神戸を本拠とし、日本語の習得をしながら姫路の日の本女学校（バプティスト派）で教鞭をとる傍ら伝道に従事した。同じ日の本女学校の英語の教師をしていた品川悠三郎の助けを受ける。姫路は陸軍の軍部があるところで外国人の在留が困難となり、先輩の宣教師であり、女子学院の教師でもあったマリア・ツルーの勧めで東京角筈（今の新宿）に移り、講義所で講義をしたり、松原、上高井戸で日曜学校を開き、新たな伝道を開始する。当時松原はまだ村であり、女子学生達に手芸を教えながらの自給伝道で相変わらず貧しさの中にいた。

やがてツルー女史の要請で女子学院の分校、新潟の高田女学校での伝道に赴く。一年後、女子学院を卒業した十時キクが高田に赴任し、キクと共に高田での伝道に励む。まもなくツルー女史の死の知らせを受ける。この頃から日本伝道への希望は傾きはじめ、所謂失意の時代に入っていたようである。在日期間満５年に及び、自分の意志と信念に基づいて伝道をしてきたフィンチであったが、ある一つの思いに至る。すなわち「日本人はキリスト教の思想のみ受けて、キリストの贖罪の福音（*1）を体得せず、真の悔い改めに至らざる国民である。改心することが見られない国民は難しい」との思いから日本伝道に見切りをつけ、帰国の準備を始めていた。

そんな明治30（1897）年３月23日のことである。たまたまこの地を伝道旅行中であった佐藤曠二牧師（後の黒田惟信、筆者の祖父）は、初対面ながらフィンチを訪ねて改心の体験などを語った。するとフィンチは直ちに自分の偏見を悟り、「今まで自分は日本人は救われざる国民であると考えていたが、日本人は救われる国民であることを知り、自分の考えは間違っていた」と認めた。こうして両師の間に軍人伝道の必要についての相談がまとまり、陸海軍人伝道義会が誕生したのはこの時だったと伝えられている。フィンチは一年後に横須賀に来ることを約束して帰国の途につく。

横須賀の状況　フィンチ来日後の翌年、日清戦争（1894－1895）が起こり、その10年後には日露戦争（1904）が起るが、日本の国内情勢は戦勝気分

に浸っていた激動の時代であり、国内には挙国一致的雰囲気が広まり、横須賀の町は明治６年から行われていた徴兵制度により何万という数の陸海軍人で溢れかえっていた。

第三章　陸海軍人伝道への強い思い

再来日したフィンチはアメリカ人が軍人に伝道するには、先ずその国に同化しなければならないと考え、日本語はもとより、書道も書道の師を招き手ほどきを受けた。また漢詩、和歌、日本史は歴史に詳しい黒田牧師より学び、しばしば史跡や御陵を訪ねた。

いよいよ明治32（1899）年９月23日、フィンチと黒田は「日本陸海軍人伝道義会」を設立する。設立の目的は陸海軍人及び一般市民とその家族にキリスト教を布教し、精神修養のみならず、身体的にも家庭的憩いを与えようとするものである。集会は日曜礼拝（午後３時）の他、黒田の聖書研究会、祈祷会、家庭訪問、送別会なども行われた。その伝道は広く浅くよりは、狭くとも深く、個人、または小グループで聖書箇所とテーマ（例：神の存在）が示され解き明かしがなされるなど、一人の魂を重んじて愛と祈りを以て仕え教え導いたという。「伝道義会」は何れの伝道協会にも属さず、単なる宣教集会のみでなく、独身者の宿泊や家族と共に食事ができるなど、他に類を見ない独特な伝道機関であったため、多数の軍人（中でもその頃横須賀に設立された海軍機関学校生徒達）が多く来会した。機関学校だけでも卒業生の5.4％がクリスチャンに当たるという。生徒らはフィンチを「マザー」と呼んで敬愛し、フィンチは生徒らを「ボーイズ」と愛称し、よき相談相手となり、伝道者として、軍人の母として、教育者として、祈りの人としての役割を果たしていく。ボーイズにとって初めて伝道義会を訪れた時の印象は「フィンチ先生の生きた信仰と、聖書によるみ言葉の証しに触れ、母のような温かいもてなしと一心の愛を与えられ、スウィートホームの楽しさがあった」というものであった。また内村鑑三との交わりもあり伝道義会の聖書研究会は「武士道主義的聖書研究会」と言われるようになる。

フィンチは40才の時日本に帰化して星田光代と改名、外国人初の横須賀市民となった。マザーは大正13（1924）年６月16日天に召された。享年55。黒田も病により昭和10年その生涯を閉じた。享年69。伝道義会は後を継ぐ者がなく解散した。だが教え子の一人、太田少将が語った如く「星田・黒田両師によって蒔かれた福音の種は年々に成長した。生徒は候補生となり士官となり、兵は下士官となり特務士官となり要職に進んだ。彼らは艦船に、陸上に、各方面に散った。到るところに少数ながら塩となり光となり「キリストの香しき馨（かおり）となった」のである。軍人伝道の流れとしては「コルネリオ会」が防衛関係者の軍人伝道として現在に至っている。

おわりに　何故これほどまでに影響をあたえるほどの軍人伝道を成し遂げられたのかを思う時、それはフィンチほどの婦人宣教師が日本に遣わされたからに他ならない。そこにはフィンチが明治の軍国時代の日本という異国に来て、多くの軍人達に宣教の種を蒔くという使命を命をかけて果たそうと働いた姿がある。太田少将の言う「日々迫る肉体的、精神的な苦労」の中でひたすら黙々と働き続け、最後まで神に従う姿勢を貫き通した。それはまさに「19世紀アメリカの女性の文化の強大なエネルギーが海外に向けて送り出した聖なる戦士」（＊2）の姿でもあった。その顕彰碑には「其献靖の精神『死セリト雖モ尚言ヘリ』ト謂フベシ」（彼女は死んだが今も信仰により語っている）と刻まれている。

注（＊1）キリスト教の教えは改心を含む贖罪という教え。贖罪とはイエス・キリストが人々の罪をあがない、人類を救うために十字架にかかったとする教義。

（＊2）参考文献：小檜山ルイ著『アメリカ婦人宣教師―来日の背景とその影響』東京大学出版会1992年（365頁）

『横浜海岸教会150年史』の編纂に関わって

岡部　一興

はじめに

『横浜海岸教会150年史』の編纂に関わったのは、2017年11月のことで、横浜海岸教会から教会史のつくり方について講義を依頼された時からであっ

た。長老と教会史編纂委員が会する場において、教会史のつくり方について話しをした。その後、2021年２月から編纂に関わったので、それ以後に関係したことについて述べたい。教会史の考え方をいうと、神の民の歴史を叙述するもので救済史を指し示すものと考える。教会は十字架と復活を信じる群れとして存在する。教会は罪人の集まりであり、罪ゆるされた群れでもある。従って、教会史はキリストを信ずる群れが主から託された宣教のわざをどのように行ってきたかを顧みると同時に、これからどのような教会をめざすべきかを志向することになる。その意味で教会史は救済史をめざすものとなる。2017年の会においては、６通りの教会史を提案した。その中で、横浜海岸教会は日本で一番古い教会なので、是非本格的な教会史を編纂してほしい旨を提案した。それに対し、その時の結論は、専門家がいないので通史は無理であるという答えだった。比較的資料が残っている、戦中・戦後の渡辺連平牧師以後から2022年の創立150周年までの所を中心に叙述することは可能であるということだった。

2021年３月の「150年史編纂委員会」

通史は編纂しないと聞いていた。しかし、2021年秋、通史を作成しているということを耳にした。翌2022年２月になって小生が編纂に加わるようになった。翌３月28日、「150年史」の編纂に当たり編集の仕事を「ヘウレーカ」の森本直樹氏に依頼することになった。編さん委員は牧師上山修平をはじめ、編さん委員長古田和彦を含め９名、アドバイザー岡部、ヘウレーカ森本、合計11名。まず、はじめに時代区分が問題になった。すでに、時代区分については「何々牧師時代」という時代区分に決まっていた。この時代区分は、牧師の就任から退任までの期間を区切るので、分かりやすい部分もある。しかし、果たして牧師中心主義の考え方で時代区分をする方法でよいのだろうかという疑問を呈した。改革長老教会の横浜海岸会の教会形成からいうと、神学的にもこの教会にふさわしい時代区分ではないという指摘をさせて頂き、組織との関係を重視した時代区分にすることを提案し、目次の組み合わせも大幅に変更させて頂き編纂委員の承認を得た。筆者が担当した箇所は、1877年J.H.バラの退任から1940年笹倉彌吉牧師が退任する所までの63年間を執筆することになった。

前史、第１編『横浜海岸教会150年史』

横浜海岸教会は1872年３月10日、11名の信徒によって創立された日本で最初の日本人によるプロテスタント教会である。この教会では、小冊子『海岸教会創立五十年略史』と『横浜海岸教会百年の歩み』がある。今回の年史は、本格的な通史として出版されたところに意義がある。序章と第１章はバラの研究者で横プロの会員である翻訳家の飛田妙子氏が担当。バラは、日本における58年間の伝道を終えて帰国、1920年11月29日ヴァージニア州リッチモンド市で死去、88歳。日本伝道のために生きた宣教師だった。これらの中で注目すべきことは、日本基督公会時代、３人の蝶者が受洗して潜り込んでいたのは他の教会にはない特徴であり、その身元が明らかになった。日本の幼稚園教育の始祖となった関信三（安藤劉太郎）、東本願寺派の長崎光永寺住職正木護、また豊田道二が仁村守三であることが国吉栄の研究（『関信三と近代日本の黎明―日本幼稚園史序説』）で明らかになった。

第Ⅱ篇

日本基督一致教会時代（1877年－1890年）

1877（明治10）年10月３日、米国長老教会、アメリカ改革派教会、スコットランド一致長老教会が合同して日本基督一致教会が創立された。小川義綏、奥野昌綱、戸田忠厚が按手礼を受け最初の牧師になった。また東京一致神学校が開校された。同年11月海岸教会の重要メンバーが東京一致神学校に入学し麹町教会の設立メンバーになった。仮牧師奥野昌綱、井深梶之助、植村正久、山本秀煌、藤生金六、その家族など有力なメンバーが大量に転出した。海岸教会では教会運営に支障をきたす危機に直面、会務を担当する者がいなくなり上田教会の稲垣信を招いてそれにあたらせた。

1879年から1893年までの時代に特徴的に表れたものを挙げると、第１には、1883年「横浜伝道会社」を設立、開拓伝道を展開。この時期、明治16年のリバイバルが起こった時に設立された。横浜で起こったリバイバルは、全国に信仰の覚醒をも

たらし、東京に飛び火し、1883年２月にイビー宣教師が明治会堂で集会を持ち1,600名を集めた。４月には大阪で宣教師大会を開き、５月には東京で全国基督教信徒大親睦会を開催。翌年の１月には同志社におけるリバイバルが起こり、祈祷会が発端となって学校全体に広がり、３月までに200名が受洗。1878年プロテスタント教会44教会、信徒1,600名だったものが、1891年には32,334名へと急上昇した。その社会的背景には､鹿鳴館が完成、欧化主義の影響もあってキリスト教が伸長し、日本がキリスト教国になるのではないという発言もあった。

第２には、横浜基督教青年会が海岸教会の信徒によって創立した。キリスト教青年会（YMCA）は、1844年６月６日ヒチコック・ロジャース商会のG・ウイリアムズとその友人11名によってロンドンに創立。1855年世界大会を開き、世界YMCA同盟が結成された。日本では、1880年東京YMCAが創立、82年大阪YMCAが、84年10月には横浜YMCAが設立された。海岸教会の青年会が主唱者となって創立された。海岸教会の長老熊野雄七が会長になり、稲垣信が指導に当たった。２年後、日本基督一致住吉町教会の長老小原鉄臣が会長になった。横浜基督教青年会は、89年から90年にかけて廃娼運動に力を注いだ。一夫一婦建白書を起草し、山本秀煌や島田加志子、二宮安治などが選ばれた。公娼制度がいかに非人間的なものであるかを知って、牧師をはじめ多くの教会員の支持を受けてこの運動が展開された。1890年11月に開かれた神奈川県議会においてクリスチャン議員宮田寅治が公娼廃止の提案をし、賛成30、反対21で議決された。議決はされたが、貸座敷業者の激しい阻止運動があったこともあって、県知事はこの決議を実行せず、蔑ろにしてしまった。

第３には、教会合同運動がある。日本基督教大親睦会やリバイバルなどの流れの中で、日本基督一致教会と日本組合基督教会との合同の機運が高まった。1886（明治19）年３月、大儀見、安川亨、松山高吉、湯浅治郎、井深梶之助、植村正久の６人が合同を推進するために日本基督教会趣意書の草案を両教派に属する教会へ送った。まず合同の経緯を概観すると、1887年５月日本基督一致教会は第４回定期大会、組合教会は第２回総会において「草案」の検討に入り、さらに合同教会の憲法や細目を作成するためインブリーをはじめとする10名の委員を選ぶ必要があるとの提案があり可決された。日本のキリスト教にとってこの二大教派が合同すれば、伝道の上に人材養成の上に大きな便益をもたらし、日本のキリスト教の革新をもたらすだろうと大きな期待が寄せられた。一致教会側は２，３の修正をして全員一致で可決した。ところが組合教会側は43教会中、17教会が合同延期の決議をし結局延期が決まった。1889（明治22）年５月22日、組合教会では神戸教会において第４回の総会を開いた。一致教会は同年５月23日に東京新栄教会において第５回の大会を開催。組合教会側に対し、一致教会がインブリー委員長をはじめとする３人がそちらに行くまで組合教会の総会を閉じないように電報で伝えたが、電報が届けられる前に総会が終わっていた。ここに教会合同は不調に終わった。

第Ⅲ篇　日本基督教会時代（1890年－1941年）

１．教会浄化問題とプリマス・ブレズレン

教勢の上昇は、教会に活力を与え経済的豊かさを与えてくれた。その一方で自らの信仰を律することができず、世俗化が進んで自己破綻する者も現れた。明治20年代前半では、日本基督一致教会中会において姦淫、放逐、不品行、不信仰などの問題が出た。日本基督一致教会と日本組合基督教会との合同決裂を前後して、新神学が日本のキリスト教に少なからぬ影響を与えた。その主だったものには、ユニテリアン思想、ユニヴァーサリスト、ドイツ普及福音があった。ユニテリアンは、1887（明治20）年12月A.M.ナップが来日、福沢諭吉から支援を受けた。唯一の神は認めるが、聖書無謬、三位一体、原罪を認めないもので、大西祝、社会主義研究会の安部磯雄、村井知至、岸本能武太らに影響を与えた。ユニテリアンやユニヴァーサリストは神学的、哲学的な問題提起であった。それに対し、普及福音教会は教会指導者に動揺をきたし影響を与えた。1885年普及福音教伝道会宣教師Wシュピナーが来日、組合教会の小崎弘道、金森通倫、横井時雄、また和田垣健三

等の指導者がこの新神学に傾倒し自由主義、歴史主義を基礎とする聖書批評学が正統的信仰である福音主義信仰を批判した。それに加えて、当時の教会とりわけ日本基督教会の諸教会に大きな影響を与えたのは、プリマス・ブレズレンであった。この派は、1830年頃J.N.ダービーを中心に英国国教会から離れた一団で、イギリス南西部のプリマスにおいて起った。日本では1888（明治21）年秋H.G.ブランドによって伝えられた。この派は、教会の制度や組織を排し、特定の教義や信条を持たず教職を置かず、聖書を唯一のものとし聖霊に導かれながら礼拝を行ない、毎週聖餐式を執行し教理上はカルヴァン主義と呼ばれる。日本橋教会では、日本橋倶楽部を組織する青年がいた。その青年の中に受洗希望者がいて、教会に来なければ受洗を授けないということだったので、プリマス派のブランドがその青年に洗礼を授けた。日本橋教会では、牧師北原義道が窃盗をした息子の罪を隠していたことが発覚、これを契機に89年10月同教会の11名が退会、また浅草教会から退会する者が出た。教会の伝道師である明治学院神学部の乗松雅休が退会する信徒を引き戻すために説得に行ったが、ミイラ取りがミイラになり卒業間近の明治23年晩春明治学院を退学、同神学部の首藤新三もこの派に移った。さらに２人と同じ海岸教会長老槇正身もこの派に離脱、大きな打撃を被った。日本橋教会では明治22年から24年８月までの間に長老２名を含む71名が日本橋教会を退会、プリマス・ブレズレンに加入した。この派については、日本基督教会だけではなく、日本組合基督教会、メソジスト教会に大きな影響を与えた。参考文献：『横浜海岸教会150年史』、2022年７月15日出版。（続く）

賀川豊彦の戦争責任告白

宮城　幹夫

序

賀川が生涯を通して社会的弱者に尽くした働きは、公共の場における防貧活動として発展し、生活共同組合、労働組合、等を設立した。更に、自伝的小説『死線を超えて』は日本ばかりでなく、多言語に翻訳され彼を一躍世界の有名人にした。一方、彼が、愛国的で、天皇制を頂点とする日本の精神風土に崇敬の思いを持っていたこと、及び、15年戦争時に、西洋諸国を批判したことで、戦後の賀川に対する評価は低下した。特に、GHQによる賀川批判、ノーベル平和賞候補に挙げられたにも拘らず、受賞を逃したこと、等は、社会的弱者に奉仕した賀川像と、天皇を頂点とする日本の精神風土に敬意を示し続けた賀川像の間にある相剋である。

しかしながら、民主・平和主義の戦後の価値観による賀川批判は、戦中という社会政治的文脈の中に生きた賀川の本性を見失う。因って、戦後賀川の戦争責任告白が不明瞭であることを持って、賀川が挫折したと判断するのは、戦時下の歴史の只中にある“神の働き”に焦点を合わせる機会を失わせることになると判断できるのではないだろうか。賀川の本性を判断する場合、当時の社会政治的文脈、戦前・戦後に賀川が引用した聖書箇所（特にロマ書９章３節、及び同書13章）、声明文、等を分析し、統合的に賀川を捉える必要がある。特に、米英との社会政治的文脈を踏まえる必要がある。何故なら、日本の学者による賀川批判に対して、米国では、賀川の愛国的な本性に自国にも存在する類似的愛国心を見出し、彼の愛国的本性を超越して、社会的弱者に仕え、又、イエス・キリストの愛を伝える“牧者”としての働きが評価されたのである。更に、日本が植民地化、或いは、軍事的侵略したアジア諸国に、賀川が贖罪の思いを持っていたことも、賀川の戦争責任告白問題を考える時、忘れてはならないことである。

２．“弱者奉仕”と“愛国心”の共存によって齎される戦争責任の曖昧性

賀川を含む日本の敗戦前基督者は、豊臣～昭和時代に於ける社会･国家権力の反基督教的風土（内在的要因）と、又、近代においては、1924年の米国政府制定の排日移民法（外的要因）によって齎された反米感情が彼らをして国家主義的キリスト者へと発展せしめた。この歴史を踏まえると、真の愛国者は基督者であることを、賀川を含む戦前

の基督者が、日本独自の神学的解釈をもって、反西洋的“国体思想に接近する”機会を容易にしてきたと判断できる。

又、1967年の教団の戦争責任告白声明以前に召天した賀川の愛国的姿勢は、ボストン大学神学部長バウンの人格主義的神学に影響を受け、生涯変わらなかった。但し、彼の愛国は、国粋主義的ではないことが､ロマ書理解で明らかである。但し、後期カルヴァン主義者がロマ章を神と統治者の二契約から神・統治者・国民の三契約と理解したことを賀川は理解していない。賀川は、同世代の矢内原が国家と対峙し、国の不正義を正すことが真の愛国的使命であると告白した姿勢とは対照的である。

３．戦後、賀川の戦争責任告白の曖昧性

戦後、賀川の戦争責任に関する告白は下記の３つに集約されると考えられる。

⑴. 1945年９月、米国シカゴ・デイリーニューズ社記者質問に対する賀川の応答

我々はとても傲慢で、自己を吟味することなく、愛や知性を欠き、軍国主義や浅はかなアメリカ理解によって道を誤った。

⑵. 1945年９月、NHK での論評

殊に此の度の戦争に於いて、日本兵がフィリピンに於いて行った残虐行為を知るに至って、全く自粛自戒し、過去の罪を懺悔し、個人としても　又　国民としても新しく出直して来なければならぬことをつぶさに悟ったのである。

⑶. 1955年、韓国大統領李承晩への公開書簡での賀川の声明

日本人が閣下を虐待し、閣下の国民を虐待したことを、私は、キリストの名によって閣下にお詫びする。

３．１．賀川自身の戦争責任告白の説明

日本の基督者と教会の戦争責任は、日本が戦争（当論文では15年戦争に限定して論じる）で一方的に軍事的侵略、植民地化した国の国家主権の侵害、国民の人権蹂躙、等に直接的にまた、間接的に関与したことであることを踏まえ、神と国・国民に謝罪し、“ゆるし”を求めるべきものである。今回の発表の主題“賀川豊彦の戦争責任告白”は、賀川個人に焦点を当てていることを踏まえ、賀川の告白の曖昧性を、下記のように判断した。又、日本基督教団は、戦中に制定できなかった“信仰告白”を1954年に制定したが、北森嘉藏が、『日本基督教団　信仰告白　解説』で、「真実の信仰告白は、先ず何よりも信仰者個人の心からなる告白であります」と解説していることを踏まえると、教団の教職者であった賀川自身も、個人としての戦争責任が求められていることは言うまでもない。

３．２．戦争責任告白が不明瞭であると判断できる理由

上記の⑴は、主語が全国民（我々）である故に、賀川個人の告白として捉えることはできない。⑵は個人と国民が並列で表現されている故に、賀川個人の告白が相対的に弱められている、なぜなら戦時下の国家権力に“天皇も神の裁きの下にある”とする信仰を貫き、日本基督教団によって教職者としての籍を剥奪され、離脱させられたホーリネス教会、及びセブンスデーアドベント教会の教職者、等、と日本基督教団の指導的立場にあった賀川を同列に位置付けることに難しさがあるからである。

⑶は、韓国大統領李承晩宛の公開書簡の主題は“李承晩ライン見直しの請願”であり、書簡で述べられている賀川の戦争責任告白は、請願の方便ではないかと李承晩に認識されてもおかしくないものである。

３．３．賀川の戦争責任告白の米国、及び韓国の受容

賀川の戦争責任告白の内容は、不明瞭であることは明確であるが、それらの戦争責任告白は、米国⑴、日本⑵、韓国⑶の夫々の国民を対象にした文脈で考える必要がある。特に、米国は、日本が反西洋を代表する国と位置づけた交戦国である。又、⑶は、日本が植民地して国民を弾圧した国であることを踏まえると、相手国（米国と韓国）の政府、国民が、賀川の戦争責任告白に関係した言動と、彼の社会的弱者に奉仕した姿勢の、

“共存性”をどのように受容しかを考察すべきである。つまり、自国への普遍的な愛国感情は時代・政治的文脈を超えて存在することを認識した上で、賀川を統合的に評価したかを見極める必要がある。

結論

賀川の愛国的な言動、曖昧な戦争責任告白にも拘らず、米国、及び韓国を代表する李承晩大統領によって賀川が受け入れられた理由は、社会的弱者奉仕にある。彼と同世代の現実主義的神学者のR・ニーバーの“強力な人間が、弱者の犠牲で自己の利害を追求することは不正義である”との告白に通じるものがある。但し、賀川はロマ書を神・統治者・国民を三契約であると理解し、基督者と教会は国の不義を正す使命があると理解すべきであった。しかし、戦後、米国での講演旅行中、賀川の戦中の反米的な言動に対する批判・一部の講演妨害にも拘らず、米国民が彼を、“弱者に支える基督者”だけでなく、“御言葉に仕える牧者”として受け入れたことをも、見落としてはならない。（米国の講演において、賀川は全米137箇所において、約30万人の聴衆を集めたことが記録されている）

以上、賀川の戦争責任に関する考察を、神学的視点を踏まえて行ってきたが、最後に、賀川の働きの今日的課題を提示する。言うまでもなく、今日の基督者の社会的弱者に奉仕する働きは、賀川をとおして今日的文脈で再検討することが求められている。ウクライナ戦争が継続している世界は、ポスト・グローバル化世界に向かって進み、世界規模の分断化（経済・安全保障のブロック化）も避けられないことが国際政治・経済学者らによって予測されている。よって、現代の分断した世界の文脈における日本において、私たち日本に置かれている基督者は、軍備を大幅に増強し非民主義的政権が樹立される中に置かれる可能性も出て来る。その文脈において、基督者は、賀川に倣い、弱者に奉仕することに励むが、終末論的な信仰姿勢を持って国と向き合うことを止めるか、あるいは、終末の希望を持って、国家の不義のために声を上げることができるかが問われてくる。

【報告】

会報の編集担当　研究会の会報は今まで代表の岡部さんが編集をしておりましたが、会の事務作業が岡部さんに集中している現状を役員会で検討、作業の再配分を考え、当面花島が担当することになりました。

今井館の移転　内村鑑三とその周辺関係者、門下生、無教会の方々の中心施設であった目黒区中根町の今井館は、施設の老朽化等で、今後の存続が問題となっていましたが、関係者の好意により土地を得て、昨年11月、文京区本駒込に建物を新築し移転しました。新しい建物は今までの今井館の思い出を残しつつ最新の設備を備え、聖書講堂、集会室、資料室、閲覧室を持ち、利用者の便が図られています。周辺には六義園、東洋文庫などがあり絶好の環境。館長には元本会の会員でもあった加納孝代氏（元青山学院女子短期大学教授、元活水女子大学学長）が就任している。

友愛書房の閉店　神田神保町の友愛書房が今年２月28日に閉店しました。キリスト教古書の専門店として古くからキリスト教関係者に親しまれた店が閉店になったことは残念です。この周辺には、三崎町教会、カトリック神田教会、猿楽町の韓国YMCA、かつてはYMCA等、キリスト教関係の施設、建物などが多くみられます。

【編集後記】　コロナ禍も少しずつ収束に向かうようです。それでも研究会の例会は横浜指路教会の会堂を借用し、参加者は座席に充分な間隔をとって開催しております。また、コロナ禍で開始したZOOMによるオンライン配信は、対面開催が再開されても遠隔地の方々の参加を可能にするため、終了せず継続しています。研究会ホームページも見てください。

今号は昨年９月より今年１月までの例会の発表要旨を掲載しました。校正段階で行数の変更に及ぶ修正をすると、手間と経費がかさむとのことで、執筆者の皆様に修正が極力少なくなるようにお願いし、執筆者の協力で、順調に編集できました。表紙（１頁）の下部に、目次兼研究発表リストを掲載、用紙の色も変えてみました。感想等お寄せください。（花島）